セカイの寄り道

イコぴょん

男の子が寄り道小僧だったころからのお話です。

一

友だちが、ばいばいの合言葉を言います。

「カズキくん、ふんじゃらけ」

「マヨリくん、ふんじゃらけ」

カズキとよばれた男の子は、友だちと別れると、ひひひひい、と笑いながら、歩いていきます。カサの先でみぞの穴っぽこをごんごんつつき、ランドセルにぶらさがった鈴を、からんからん鳴らし、ポケットの中の石ころを、じゃらじゃら言わせながら。

カズキは寄り道がだいすきな子どもでした。友だちと別れてひとりの通学路は、右へ行っても左へ行っても前に行っても後ろに行ってもいいのでした。

「月極駐車場」に入って、すみっこのタイヤにこしかけると、道のわきでむしった草をぷうぷう吹き、空を見上げます。さわやかな青空にうかんでいる雲のたったひときれを見て、夜になったら雨が降るだろうと感じるのでした。

カズキの予報は、天気予報よりもよく当たりました。もっとも、大人たちに、

「今日は雨ふらないよ」

と伝えても、大人たちは信じちゃくれません。

「ばかなこと言ってないで、もっていきなさい」

と、カサをにぎらせるのです。よく知っているぼくの言葉より、知らない人の言葉を信じるんだね、とカズキは思いますが、それを言葉にすることはできません。

「ふんじゃらけ」

誰もいない「月極駐車場」のすみっこで、カズキはつぶやきます。

駐車場に敷きつめられた砂利を拾って、ポケットにしまいます。カズキの制服のポケットは、帰り道にカズキが拾った石ころや、ＢＢ弾、ビーダマ、パチンコ玉などで、ごりごりにふくれています。石ころたちは、寄り道のすきなカズキの、誰にも言わない宝物だったのでした。

カズキのポケットがまた少しふくれた、そのときでした。

ズバァン、

と、

大きな、

大きな風が起こったのです。

風は鉄砲のように鳴って周りの家の窓々をうち、空き缶をふきとばし、生き物の悲鳴をさらって、砂利を大きなじゅうたんのようにめくりあげました。

すわっていたカズキも、タイヤといっしょにめくられて、わっ、と思う

拍子に、ぐるん、とひっくり返りました。また青空が見えました。
タイヤの穴ぼこに、カズキのお父さんが風呂につかるときのようにしずみこみ、手足を外に突き出した格好で、カズキは、
「風、風！」
とさけびました。おったまげて、そう言うしかなかったのでした。
カズキがタイヤから起きてなんとか立ち上がると、目の前のセカイは、まるでセカイそのものがぐいっと寄り道したように、何もかもが巨大な、カズキの知らない、新しいセカイに生まれ変わっていたのでした。

二

カズキがランドセルを背負って駐車場を出ると、さっきまであった家々は、ブロック塀を何十メートルもそびえ立たせていました。門はどこにも見当たりませんでした。
道もいつものとおりではありませんでした。路面は一歩踏み出すと、次々にその色を変えていくのでした。カズキは下を見ながら歩いていきました。はじめは灰色だったアスファルトが、べたっ、べたっ、と、チューブから出した絵の具をそのまま塗りつけていくように、赤くなる、青くなる、黄色くなる。黄、黒、黄、黒ときて、カズキは目がちかちか痛くなり、腕がむずむずかゆくなり、足がかたかたふるえだすのを感じました。
カズキは歩きながら、気をまぎらわすように、塀にカサを打ちつけてみましたが、ごつん、という音が小さく、小さくひびくばかりで、びくともしません。どこからか、犬のうなり声が聞こえてきました。
やがてあらわれたビルは、空のなかに頭をつっこんだように大きく、銀色の窓が、太陽の光をはねっかえして、ぎらぎらと光っていました。
カズキはまぶしくて、目を何度もしばたたきました。カズキはレントゲンを思い出しました。ビルの光に当たっていると、あの、よく分からない機械に、自分がべったりくっついているような気持ちがしたのでした。
遠くに小さな人影が見えました。
「あっ！」
カズキはいきおいよく手をふりました。この巨大で、目のいたくなるようなセカイに、自分と同じ人間がいたことが、うれしかったのです。
相手はカズキに気づいたようです。足音を立てながら近づいてきました。カズキもかけよります。
するとどうでしょう、カズキの目のなかで、はじめは黒い豆つぶのようだった人間が、だんだん、づんづん、どんどんと大きくなって、あれ、この人かなり大きいぞ、と思った次の瞬間には、カズキの頭の上で、人間の真っ黒い足の裏が、カズキをふみつぶそうとしていたのです。
カズキはもう泣きたくてたまりませんでした。ところが、あたたかい風がひゅうと吹いて、カズキを包みこんだかと思うと、カズキをその人の足の下から、ゆっくりと連れ出してくれたのです。
巨人を見やると、顔も、身体もすべて真っ黒けで、笑いも、泣きもせず、足早に、カズキの来た方へ、まっすぐ歩いて行ってしまいます。
カズキはまだふるえていましたが、あたたかい風が、ほほや、かみの毛をやさしくなでるので、やがてふるえはおさまりました。ひょっとしたら

今までも吹いていた風じゃないだろうかとカズキは一瞬思いました。かぎなれたにおいを、もう一度、新しくかいだような気分でした。

またゆっくりと歩きはじめたカズキは、ポケットのなかの石ころが、ぶるる、ぶるる、とふるえているのに気がつきました。

それを取り出してみると、ぱあっ、と、虹がはじけるように青空に光があらわれました。

光は形をもって、カズキの目の前で、いくつもおどりだしたのです。

ドラゴンの形になりました。

ゴム銃の形になりました。

友だちのマヨリくんの形になりました。

いとこのお兄さんの形になりました。

石ころだった光は、みんな、カズキのあとをひらめきながら、ついてきました。光たちは、ビルのあいまで宙返りしたり、家の塀にすがたをうつしてすもうをとったり、道路で色鬼をしたり。

何かにぶつかって消えても、まばたきのあとには、またそれらの形がもどっているので、カズキは、スキップするほど楽しい気持ちになりました。巨人たちは、それからも次々にあらわれて、カズキに近づいたり、カズキのことなどしらんぷりして歩いていったりするのですが、カズキはもうあたたかい風のにおいをたっぷりかいでいましたし、光が近くにいておどってくれましたので、すっかり平気で、

「へろもげっぴ」

とつぶやく余裕すらあったのでした。

三

いくつもの太陽が、カズキのまわりをくるくるとまわります。カズキがそれを指ではじこうとしても、太陽の動きが速すぎて、ちっともとらえられません。

歩き続けていたおかげで、カズキは速く走れるようになっていました。速く走れるのがうれしくて、カズキはめちゃくちゃに走り続けました。するともっと速くなりました。背負っていたはずのランドセルは、どこかに置いてきてしまいました。

今でもカズキを包むあたたかい風は、走っていると、なんだかじゃまくさくなってきました。

「なあ。ぼくはもう、風の力は、必要ないよ」

カズキは言いました。あたたかい風は、それでもカズキのまわりで、ひゅうひゅうと鳴り続けます。

「なあ。もういいって」

まとわりついてくる風を、力をこめると筋が走るようになった腕をのばして、ばっとふりのけました。ひゅう、ひゅう、と風が鳴りました。

カズキは前のめりになって、ひたすら走っていきます。黒い巨人は、いつの間にかカズキよりも小さくなっていました。顔のない人間はいくつも目の前にあらわれましたが、カズキはおかまいなしに走り抜けました。肩がぶつかりそうになると、

「おい、じゃまだよ」

と言って、さっき風をふりのけた腕を、またがむしゃらにふるのでした。
しばらく行くと、看板が出ていました。カズキは足を止めました。
『トマト投げ
カゴいっぱい五千円』
よく見ると、看板のとなりにはおじさんが、もみ手をして、立っているのでした。
「なあ。おじさん、高いよ」
「何を言う。こんなに安いものはないよ」
おじさんが、空に向かって両腕を高くあげて、首をふりました。
「坊主はもう、光は見えないのかい」
「そんなもん、見るもんか」
坊主とよばれたことに腹を立てたカズキは、ぶっきらぼうに言いました。
そういわれてみれば、あんなに楽しげにおどっていた光は、カズキのまわりから、すっかり消えているのでした。
「トマト投げ、どうする。楽しいよ」
「どれくらい楽しい？」
「そりゃもう脳みそがよじれるくらいに楽しいさ」
脳みそがよじれるなら、ぜひともやってみたくなりました。
「やるよ」
と言ってお金をわたすと、おじさんは、黄色い歯茎を見せて、
「まいど、まいど。今日はサンマだあ」
とうれしそうに、ニタニタァ、と笑いました。

何人もの、カズキくらいの背丈の男の子が、トマトを的にぶつけてあそんでいました。
「的の真ん中に命中させると、百点だよ」
とひとりが言うので、
「百点になると、なにかあるの？」
とカズキがたずねると、
「別に。またトマトがもらえるのさ」
と言って、それ以上は話しかけてこようともせず、トマトをぶつけるのに戻ってしまいました。
カズキはおじさんからカゴいっぱいのトマトをもらっていたので、とにかくカゴがからっぽになる前に、ひとつでも当てればいいやと思って投げはじめたのでしたが、これがやっぱりというのか、なかなか当たらないのです。ひとつも命中しないまま、カゴはからっぽになってしまいました。
トマトは、的の前や後ろに、いくつも赤い筋を引いていました。
となりの男の子は、ぐちゃん、とトマトを的に命中させます。フォームも、まるで十年間もトマト投げを夢中になってやってきた人のようにきれいです。男の子はちらっとカズキを見て、笑いかけました。
「なんだよ、ちくしょう」
カズキはむかむかしてきて、おじさんに、また五千円を支払いました。
何十度目かのトマト投げで、カズキは的のはしっこにようやくトマトを命中させることができましたが、そのときには、もうあたりは真っ赤で、池のようにトマトの汁がたまっていました。

「つまんねえの」
カズキはカゴをふりすてて、走りはじめました。

四

太陽は目をこらすと見えました。けれどもカズキは目をこらすということをすっかり忘れてしまいましたから、太陽が、カズキのまわりを、いつでもまわり続けていることだって、すっかり忘れてしまったのでした。
カズキは風より速く走ることだってできるようになっていました。いつの間にか、あのあたたかい風は、すっかり置き去りにしてしまいました。振り向けば、まだ遠くで、ひゅう、ひゅうと、ささやくように鳴っているのかもしれませんが、カズキは、後ろを見ることなんて、しませんでした。
でもなんか、ばからしいな。走るのも、もうやめよう。
走ることをやめたカズキの前には、たくさんの看板が出ていました。足の踏み場もないほどの数の看板でした。カズキは人ひとりがやっと通れるほどのすきましかない通路を、看板をながめながら歩いて行きましたが、すぐにつかれてしまいました。だって看板には、
『順路はあちら』
『順路はこちら』
『順路はそちら』
『順路はどちら』
と書かれているばかりで、いったいどっちが正しい順路なのかも分かりません。それでもカズキは、次々にあらわれる看板にしたがう以外に、することもないのでした。いくつもの看板にしたがって、あらわれた曲がり角を左に、右に、休みなく進んでいきます。
カズキはくたくたになりました。もういい加減に休ませてくれ、助けてくれ、と思う拍子に、看板の迷路を抜けました。そしてその先の、一本道の暗がりに、カズキと同じくらいの背をした、黒い人間があらわれたのです。
「やあ、まじめですよ、ぼくは」
とカズキは言いました。
黒い人間は、何も言いません。
「まじめなんですよ、ぼくは」
カズキはもう一度言いました。
黒い人間は、だまりこくったまま、腕を、すっとカズキに向けてのばします。その手には、封筒がにぎられていました。
受け取ると、封筒には、〈ショウヨ〉と書かれています。
なかには紙切れが一枚はさまっていて、こう書いてあるのです。
『何をのぞむ？
足
腕
頭
荷物』
カズキは考えこんでしまいました。あんだけ休みなく迷路をがんばりつづけて、何がもらえるっていうんだ？　足ならぼくは十分速い。けど、も

らえるんなら、もっと速くなりたいさ。どこだって、すぐに行けちゃう足が。腕ね、腕もほしい。手が足りないようなときに、どんどんはたらいてくれる腕がね。頭か、もちろん頭は大事だ。頭がなくっちゃ、何にもできないよ。優秀な頭があれば、ぼくはいくらだって、なんだってできるだろう。荷物？　荷物なんていらないよ。そんなものがあったって、邪魔なだけさ。

カズキは頭をのぞみました。するとどうでしょう、カズキは、いくらだって、なんだってできる頭を、本当に手に入れたのです。これは驚きました。カズキは急いで、看板の迷路に戻りました。そして来た道をすっかり戻ると、また迷路をやっつける作業に戻りました。今度はもっと速く、黒い人間のところまでたどり着きました。

黒い人間は、封筒を差し出しています。

『何をのぞむ？

足

腕

荷物』

今度は足をのぞみました。すると、今まではとうてい出せなかった、ものすごいスピードで、ぶっとぶように走ることができるようになりました。まわりの木々だって、ビルだって、家々だって、走るカズキの目には、ただの模様になりました。カズキはまた迷路に戻りました。

『何をのぞむ？

腕

荷物』

次は腕をのぞみました。すると、今まで力が足りなくてできなかったことが、次々にできるようになりました。カズキはなんだって持ち上げることができましたし、ひとつかみで世界をねじまげてしまうこともできました。

ここまでなんでもかなえたカズキでしたが、どういうことでしょうか、心には、ぽっかりと、タイヤに空いた穴のような悲しみが、じんわりとも れ出しているのでした。

「ぼくは、なんだってできるようになったよ」

黒い人間に向かって話しかけても、何も答えてくれません。

「ぼくはどこへだって行けるし、なんだってできる」

カズキは続けて言いました。

「でもこの、胸の悲しみはなんだろう。ねえ、ぼくに、荷物をくれないか」

もちろん、迷路のいいなりになって、きちんとたどってくれば、荷物は手に入るのでした。

カズキは、荷物を手に入れました。

両肩が、ずしんと重たくなりました。

「これかな、ぼくの胸の悲しみを埋めてくれるのは」

今まで、羽のように軽々と走りまわることができたカズキは、とつぜんうまく歩けなくなってしまいました。

「もう、ぼくは、勝手に走りまわったり、できないんだね。この荷物は、おろしちゃいけないんだね。だって、ぼくが選んだんだもんな」

黒い人間は、変わらず、立ち続けているのでした。

五

それからずいぶん経ちました。カズキは荷物を背負い、相変わらず歩き続けていました。途中で何度も落としそうになったり、もう捨ててしまおうかと思ったりしましたが、そのたびになんとか背負い直してきたのでした。

老いぼれ太陽がカズキのまわりをまわっているのが、今でははっきりと見えています。

「お前はずっと、まわり続けてきたんだろ」

カズキが言うと、太陽は、うなずくかわりに、やっぱりカズキのまわりをよろよろ飛ぶのでした。

「この荷物も、ずいぶん軽くなったよ」

以前はあれほどどぎつい色をしていた道路も、今は淡い水のような色に変わっています。カズキはときどき足を踏み外して、水のなかに落ちるようにからだを崩しますが、荷物はもう軽かったですし、自分自身も、もうじゅうぶんに軽くなってきているような気がしたのでした。

家々も、ビルも、何もかもが、ぼやけていました。

「きっともうすぐ何も見えなくなる」

とカズキは、誰にともなくつぶやきました。

「何も見えなくなっても、別にいい。ぼくはもう、色んなものを見すぎたよ」

本当にカズキは、色んなものを見すぎたのでしょうか？

「ぼくはどうして歩き続けてきたんだろう？」

どうしてでしょうか？

「ぼくは別に、もう歩かなくても、いいんじゃないかな」

そうですね。歩かなくても、いいのかもしれません。

「そろそろ止まるよ。横になりたいんだ」

カズキのために、布団が用意されました。

「ありがとう」

どういたしまして。

カズキは歩みを止めました。

そうしてゆっくりと膝を折ると、布団に入って行きました。

「おやすみ」

おやすみなさい。

カズキは目を閉じました。

六

青空が、夕焼け空に変わっていました。

風が冷たくなっています。

ずいぶん長い間、眠っていたようです。

カズキはねぼけまなこをこすり、月極駐車場から出ると、ポケットのなかの、ごりごりした石ころをさわりながら、家に戻っていきます。

あっ、ぼくの予報は当たるよ。

今夜は雨。

だってほら、向こうの空が、くもっているのが、見えるでしょ？

（了）